

寺田屋:お登勢

お登勢(1829-1877)は、寺田屋旅館の最も有名な女将の名前である。近江国大津(現在の滋賀県)の宿屋の次女のお登勢は、18歳の時に伏見に引っ越した。彼女は、寺田屋旅館の所有者の寺田屋伊助(生没年不詳)の妻になり、一人息子と二人の娘をもうけた。伊助は商売に望みを持っていなかったため、お登勢はすぐに旅館の日々の経営を引き継いだ。女好きで大酒飲みの伊助が、35歳で亡くなった時、お登勢は寺田屋の経営を完全に担うようになった。

お登勢が旅館を経営している間、寺田屋は薩摩藩の反幕府派が、伏見に来た時の常宿となった。1862年5月21日、薩摩の事実上の藩主であった島津久光(1817-1887)が、反乱軍を薩摩へ強制的に帰還させるために彼らを鎮圧する部隊を送り出した時、寺田屋は、寺田屋騒動または最初の「寺田屋事件」の舞台となった。この戦いの結果、9人が死亡した。流血の中、お登勢はしっかりとしていた。彼女は3歳の次女を籠に隠し、収入を確保できるよう帳場を守った。戦いの後、薩摩藩から被害の補償を受け取り、戦いによる損害を修復し、再び商売を始めた。

お登勢は、坂本龍馬(1836-1867)などの過激な反徳川武士達の面倒を日頃からみており、親友や友人となった。彼女は、後に龍馬の妻となった女中のお龍(1841-1906)を雇い、彼女を「娘」として養女にし、彼女の母親に経済的援助まで行った。

2回目の寺田屋事件(1866年3月9日)での龍馬暗殺未遂をきっかけに、お登勢は「関わりのある危険な人物」として幕府に目を付けられ、投獄されそうになった。倒幕に成功した9年後の1877年に彼女は亡くなった。彼女が経営し、愛した旅館からさほど遠くない伏見松林院に彼女の墓はある。彼女の寛大な精神と快活さは、今日、日本国民に慕われ、彼女の物語はしばしばテレビや映画で取り上げられている。